

中学校社会科の振り返り活動に関する考察

—OPP シートとアンケート調査の分析から—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 授業力高度化コース
206019 山田 裕貴

中学校社会科の振り返り活動に関する考察 —OPPシートとアンケート調査の分析から—

山田 裕貴
授業力高度化コース

要約：本研究の目的は、全ての生徒が質の高い振り返りを行えるよう、その指導と支援の在り方を検討することである。そのために、まず、学習指導要領や先行研究から、社会科における質の高い振り返りとは何か、定義づけを行った。その結果、認知面と思考面から定義づけを行うことができた。次に、その定義をもとに、筆者が教職専門実習Ⅱで実践したOPPシートと生徒のワークシートの分析を行った。その結果、質の高い振り返りができる生徒は授業時から主体的に認知や思考の調整を行っていることが明らかとなった。つまりこれは、振り返り活動の指導に当たって、授業時から生徒が思考の整理や認知の調整をしやすいような指導・支援が必要ということである。これまでの先行研究では振り返りシートの形式や振り返り活動時の指導・支援に目が向けられていたが、質の高い振り返りを行うためには、授業時からの指導が重要だと明らかになったことは、本研究の成果と言える。

キーワード：振り返り活動、1枚ポートフォリオ評価、ノートフレーム、社会科

1. はじめに（本研究の背景・目的）

振り返り活動は、現在多くの授業で取り入れられている学習活動である。主に授業の終末や授業後に行われ、学習者自身が本時の授業で学んだことを振り返り、その内容をノートやワークシート等に記録する等、様々な方法で行われている。

振り返り活動について、平成29年に改訂された中学校学習指導要領の「総則」では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の指導の配慮事項として、「生徒が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」（文科省, 2017a, p. 24）と明記している。さらに同解説編では「生徒が当該授業で学習した内容を振り返る機会設ける」等の指導は「生徒の学習習慣の定着や学習意欲の向上が図られ学習内容が確実に定着し、各教科等で目指す資質・能力にも質するもの」（文科省, 2017b, p. 87）と述べられており、振り返り活動の重要性が指摘されている。

一方で、筆者が専門実習Ⅰで行った授業の振り返り活動では、振り返りシートの生徒の記述欄に「本時のまとめ」とだけ記載したため、教科書やワークシートの内容を丸写ししただけになってしまったものが見られた。このような現状はどの教育現場でもしばしば見られており、それについて今（2021）は「学んだことを漠然と思い出して書く方法では、深い思考、深い理解を促す質の高い振り返りに至らない場合が多い」（p. 24）と指摘している。

では、なぜこのような現状が起きているのだろうか。その理由として、授業者の振り返り活動に対する指導不足が考えられる。授業者の振り返りの指導が不十分であるために、生徒は感想や学習した内容を写すだけに至っていると考えられる。また授業者自身も、振り返り活動の目的や意義を曖昧なままにしているため、指導が疎かになってしまっている可能性もある。

そこで本研究では、先行研究から振り返り活動の意義を整理し、その重要性を明らかにする。次に、社会科の視点から質の高い振り返りとは何かを明確にし、1枚ポートフォリオやワークシートの分析、アンケート調査から、その指導や支援の在り方について検討していく。

2. 振り返り活動に関する先行研究

2.1 振り返りの3つの意義

今（2010）は振り返り活動の意義として、「1. 自身の学びや考えを整理することができる」「2. 学びの軌跡を評価に反映させることができる」「3. 授業改善に活用することができる」（p. 3）の3点をあげている。以下この3点をもとに振り返り活動の意義について整理する。

「1. 自身の学びや考えを整理することができる」とは、いわゆる「メタ認知」のことである。堀（2019）は自身が提唱し、振り返り活動の一つである「一枚ポートフォリオ（OPPシート）」が、思考や認知過程の内化・内省・外化を適切に機能させるとした上で、「思考や認知過程の内化・内省・外化は、（中略）メタ認知能力の育成にとっても極めて重要な役割を果たしている」（p. 166）と述べている。つまり振り返り活動を通して、自らの学習状況や認知・思考の過程を客観視し、さらなる学びに繋げていく「メタ認知能力」を育成できるといえる。

「2. 学びの軌跡を評価に反映させることができる」という意義について今（2010）は、学習者の「自己評価」と授業者「学習評価」の両面から考えられるという。まず学習者にとっての意義について、「自己の学びの軌跡（がんばりのプロセス）が一目でわかるようになります。これを自己評価すれば自信にもつながります」（p. 3）と述べている。つまり、生徒は振り返りの積み重ねで自身の学習の変容や成長のプロセスを客観視することができ、その中で学びの必然性を感じたり学習意欲を高めたりすることが期待できるということである。

一方で授業者にとっての意義について今（2010）は、「子どもの日々のがんばりを『評価』に活かすことができ、（中略）このプロセスを評定に反映させることができる」（p.3）と述べている。中央教育審議会（2016）は答申の中で、学習評価について「子どもたち一人一人が、前の学びからどのように成長しているか、より深い学びに向かっているかどうかを捉えていくことが必要である。」（p.60）としている。子どもの学習過程から見られる成長の様子を捉えるために、学習者の認知の状況や考えの変容が分かるように各授業の振り返りの積み重ねを教師は見取り、それを評価に反映することが求められていると言える。

最後に「3. 授業改善に活用することができる」という点について今（2010）は、教師としてのメリットとして取り上げ、「『授業の内容が子どもたちに伝わっているかどうか』も、ある程度把握することができます」（p.3）と述べている。つまり授業者が本時の「ねらい」や「めあて」としていたものに、学習者がどの程度到達しているかを振り返りの記述から把握することができ、次の授業に向けた指導の改善点を明らかにすることができるということである。

2.2 振り返り活動の先行研究と「1枚ポートフォリオ評価」

振り返り活動の代表的な先行研究として堀（2019）が提唱する「1枚ポートフォリオ評価（以下 OPPA）」がある。「一枚ポートフォリオ評価（OPPA）」とは「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙（OPP シート）の中に学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価する方法」（p.35）である。OPP シートの構成要素（図1）は以下の通りである。

OPP シートの構成要素は「Ⅰ 単元名タイトル」「Ⅱ 学習前・後の本質的な問い」「Ⅲ 学習履歴」「Ⅳ 自己評価」の4つから構成されている。まず学習前の本質的

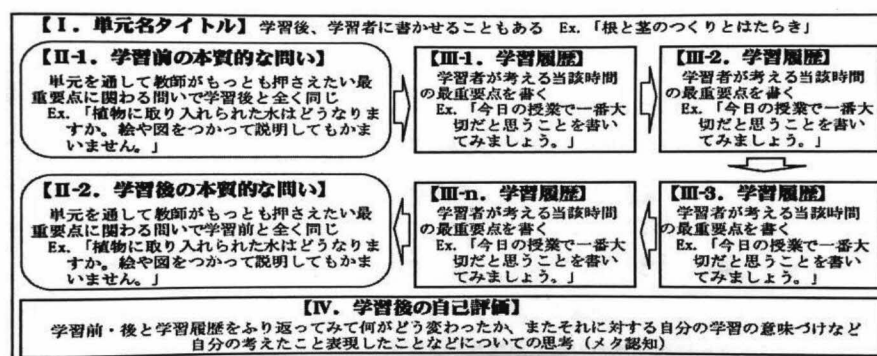


図1 OPP シートの基本的構成要素と骨子（堀, 2019, p. 38）

な問いを通して学習者に既知の知識や考えを知らせる。次に、「学習履歴」で授業ごとに「授業の一番大切なこと」をまとめさせる。そして最後に、学習後の本質的な問いで既知の知識や考えがどのように変容したのかを確認させ、学習全体を自己評価させる働きかけを行っている。

これまで行われてきている振り返り活動の先行研究には、この OPPA を参考に振り返りシートを作成し、シートの形式を研究の重点として置かれているものが多く散見される。一方で高

田（2021）はこれらについて「質の高い振り返りを行うための具体的な指導者の働きかけについて述べられていない」（p. 105）と指摘している。つまり振り返りの質を定義した上で、それに向けての具体的な指導の働きかけを検討する必要があると言える。本研究においても質の高い振り返りを定義し、それに向けてどのように指導・支援するか検討していく。

3. 質の高い振り返りの定義

高田（2021）は質の高い振り返り活動を「学習内容を鮮明に想起でき、学習以外の場面でも活用できる振り返り」（p. 105）と定義している。ただこれは高田（2021）が実践した家庭科における定義であり、社会科では「社会的な見方・考え方」を踏まえて定義づける必要がある。また振り返り活動には「メタ認知の育成」ができることを確認できた。メタ認知の育成は、学習者が自身の認知・思考の過程を客観視し、それを振り返りとして外化することで可能となる。そこで質の高い振り返りを認知面と思考面で検討する必要がある。

3.1 認知面における質の高い振り返り

まず振り返りでは、学習者が授業を通して学んだ内容を、「社会的な見方・考え方」を活かしながら、いかに自分の認知構造に「内化」したかを明らかにする必要がある。

「社会的な見方・考え方」とは、小学校社会科、中学校社会科の各分野の特質に応じた見方・考え方の総称である。そのため本研究では後述の実践で行った歴史的分野における「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を基準に、質の高い振り返りを検討する。「社会的事象の歴史的な見方・考え方」について学習指導要領社会科解説編によると「社会的事象を、時期、推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にし、事象同士を因果関係などで関連づけること」（文科省, 2017c, p83）と明記されている。

以上を踏まえると、認知面での質の高い振り返りとは「本時で学んだ社会的事象・事項それぞれを関連付けながら、本時のねらい（めあて）に則して要点を絞り自分なりにまとめている」と定義づけることができる。

3.2 思考面における質の高い振り返り

学習者が「内化」をする際に合わせて行っているのが「内省」という行為である。堀（2019）によれば、「内省」とは「自己の内部に取り入れた物事や情報について、自分自身の考え方や方法に照らして意図的に吟味する過程」（p. 151）と説明している。つまり生徒が授業や学習を通して取り入れた知識や情報について考えをめぐらせたことである。そのため授業時にどのように「内省」を行ったかを振り返りで記述させ、明らかにする必要がある。

これを踏まえ、思考に関わる質の高い振り返りとは「本時で学んだ社会的事象について、自らが考えたことや疑問等を自分の言葉でまとめている」と定義づけることができる。本研究では、以上2つを質の高い振り返りの定義とし、指導や支援を検討していく。

4. 実践とアンケートの分析

筆者は教職専門実習Ⅱで「OPPシート」を作成し、授業実践を行った。本章ではその実践とその後に行ったアンケートを分析し、具体的な指導と支援について検討する。

4.1 「OPPシート」を用いた実践の概要

教職専門実習Ⅱでの実践の概要について整理する。実践した単元は東京書籍『新編 新しい社会 歴史』の第7章「現代の日本と世界」第1節「戦後日本の発展と国際社会」である。全6時間で単元を構成し、各時間で使用するワークシートと別にOPPシートを作成し実践を行った。使用したOPPシート（図2, 3）は以下の通りである。

図2 OPPシート(表)

図3 OPPシート(裏)

まずOPPシートの表面には「学習前・後の本質的な問い」として「戦後日本の政治や社会がどのように変化したか?」という問いを立て、それについて記述する欄を設けている。裏面には「学習履歴」として各授業のタイトルと「最も大切だと思ったこと」を記述する欄を設けている。まず授業の第1時の冒頭でOPPシートの書き方を説明した後、学習前の本質的な問いについて記述させた。各授業の終盤には学習履歴を書く時間を設け、振り返りを行わせた。そして全ての単元が終了した後、学習後の本質的な問いについてまとめさせ最終提出をさせた。次節ではこの実践の結果とその分析について述べる。

4.2 振り返りシート（OPPシート）の分析

OPPシートの分析は、生徒の振り返りシートの記述を、授業それぞれのねらいと、質の高い

振り返りの定義をもとにして作成した評価規準（表 1）を照らし合わせ 3 段階（A・B・C）で評価をすることで行った。評価は、筆者を含めた社会科を専攻とする教職大学院の大学院生 3 名が、あえてトライアングレーションせずに行った。そのため評価が少し分かれている点もあるが、様々な視点で評価することで客観性が増していると言えるだろう。

表 1 OPP シートの評価規準

A	授業のめあてに則した内容で、かつ具体的な記述で、振り返りをまとめている。 また学習を通して考えたことや疑問に思ったことをまとめている。
B	授業内容（本人が重要だと思った箇所）について自分の言葉でまとめている。
C	事実・内容の羅列。WS の丸写し。無記入。

合わせて授業で使用したワークシートの分析も行った。ワークシートは授業のノート代わりの役割を果たすものである。そのため、生徒の思考や認知過程に関わる内容がワークシートに現われると考え、分析の対象とした。ワークシートの分析では質的評価は見合わない判断し、ワークシートの穴埋め以外の欄外記述項目の数で量的評価を行った。OPP シートとワークシートの評価の結果を以下の表 2, 3 に示す。

表 2, 3 OPP シート及びワークシートの評価一覧（左：前半 右：後半）

生徒番号	評価者 1	評価者 2	評価者 3	欄外記述項目数
⑳	A	A	A	90
⑰	A	A	A	84
㉑	A	A	A	77
⑮	A	B	B	75
③⑩	A	B	A	47
②⑥	A	A	A	45
⑤	A	A	B	41
⑬	A	B	A	41
⑧	A	A	A	40
③④	A	A	A	34
⑰⑨	B	B	B	32
③②	B	B	B	32
⑰⑥	B	B	B	30
③①	B	B	B	28
①⑪	B	B	B	27
⑥	C	B	B	23
②⑤	B	B	A	20
②⑨	B	B	B	19
②	C	B	C	16

生徒番号	評価者 1	評価者 2	評価者 3	欄外記述項目数
④	B	B	B	16
②①	B	A	B	16
⑩⑩	B	B	B	14
⑨	B	B	B	12
⑦	C	C	C	11
⑫	B	B	B	11
③⑥	B	B	B	11
③⑦	B	B	B	11
①	B	B	B	10
⑰⑧	B	B	B	10
②⑩	B	B	B	10
③⑤	B	B	B	9
③⑧	B	B	C	9
③	B	B	B	4
⑭④	B	B	C	4
②③	C	C	C	3
③③	C	C	C	3
②④	B	B	B	2
②②	B	B	B	1

分析の結果、OPP シートの評価と欄外記述項目数に一定の相関があることがわかった。表 2, 3 が示す通り、欄外記述項目数上位 10 名の生徒に評価 A が集中し、B 及び C の生徒が下位に位置していることが見て取れる。当然、欄外記述が多ければ必然的に振り返りの質が良くなると断

定はできない。しかし、欄外記述が多いということは授業時にワークシートを穴埋めするだけにとどまらず、教師の発言をメモしたり、自らの思考を整理し、それを記録したりしていると言える。つまり振り返りの質が高い生徒は、授業を受けている時から常に思考を巡らせ知識を整理し、それが結果として振り返りに反映されていると仮説を立てることができる。

そこで筆者は、生徒に対して振り返りに関するアンケートを実施し、授業を受けている時に意識していることや工夫していること、それが振り返り活動に活かされているかを調査した。

4.3 アンケートの分析

アンケートは、筆者が授業を行い振り返りシートを提出させた 38 名の生徒を対象に、授業を受けている時に意識していることや工夫していることを自由記述で、生徒が振り返りを書くときに悩んでいることについて選択式で回答させた。

まず授業を受けている時（先生の話聞く時、板書をする時）に意識していることや工夫していることについてである。この質問に対しては、「先生の発言で重要だと思ったことはメモする」や「ワークシートに載っていないことが板書されたら、それもメモする」など 38 人中 26 人の生徒が、ワークシートの穴埋めだけでなく、教師の発言や教師が追加で書いた板書をメモすると回答した。このことから多くの生徒が、教師の話をただ聞いて穴埋めするのではなく、教師の発言を注意深く聞き、メモを残していることがわかった。一方で、質の高い振り返りをした生徒の回答をみると、他の生徒とは違う特徴が見られた。例えば、表 2 の 28 番の生徒は教師の話聞く時に意識していることについて、「ただ聞いているだけでは理解できないから、自分で説明できるよう流れを感じて聞いている」と回答した。他に、13 番の生徒は板書を写している時に工夫していることとして、「わからない言葉が出てきた時には近くに意味を書く」と回答した。また 27 番の生徒も、「自分が後から見て分かるように工夫してメモしている」と回答している。これらより、質の高い振り返りが書ける生徒は他の生徒とは違い、授業時にメモを取りながら、主体的に思考の整理と認知の調整を行っているということが窺えた。

以上より、全ての生徒がより質の高い振り返り活動ができるようにするためには、振り返り活動の指導・支援のみに注目するのではなく、生徒が授業時から思考を整理したり、知識を内化・内省したりしやすいような指導・支援を検討する必要があることが明らかとなった。

次に、生徒の振り返り活動をする際に抱えている悩みについての質問である。アンケートの結果を表 4 に示す。アンケートの結果からわかる通り、半数以上の生徒が「振り返りをどのように書けばいいかわからない」を選択している。このことから振り返り活動の支援においては、振り返りの書き方やまとめ方を中心に検討する必要がある。またその他項目においても一定の

悩みがある生徒がいる。そのため、それぞれの悩みに応じた支援を検討する必要がある。

表4 振り返り活動の悩みに関するアンケート結果

振り返り活動をする時に、困ったことや悩んだことはありますか？		
回答選択肢	選択した人数	割合(%)
A. 振り返りに何を書けばいいかわからない	6 人	15.8%
B. 振り返りをどのように書けばいいかわからない	21 人	55.3%
C. 振り返りを書く時間が足りない	9 人	23.7%
D. 書くこと自体がしんどい、面倒	7 人	18.4%

調査結果（複数回答可）：総数 38 人

5. 振り返り活動の指導と支援

生徒の振り返りシートとアンケートの分析から、生徒が質の高い振り返りを行うためには振り返りを書く時間だけでなく、授業時から生徒が思考を整理できるよう工夫しなければいけないことが明らかになった。そこで本章では授業時と振り返り活動時の二つの面から、指導と支援について検討することとする。

5.1 授業における指導と支援の検討

前章で明らかになった通り、質の高い振り返りができる生徒は授業時から主体的に思考を整理し、認知の調整を行っている。しかし当然、全ての生徒が主体的に思考の整理や認知の調整をできるわけではない。そこで提案したいのがノート（ワークシート）を活用した指導である。工藤（2018）はノートを取る目的について、「後で見返し、学んだことを

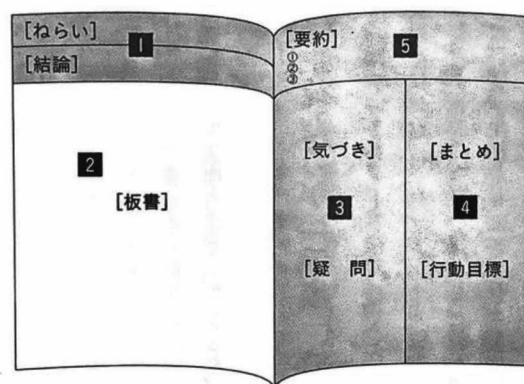


図4 麹町中学校のノートの基本フレーム

定着させること」（p. 105）と述べている。そして工藤は、自身が校長として勤めていた千代田区立麹町中学校で図4のようなフレームワークを導入したノートづくりを行った。工藤（2018）はこのフレームワークを活用したノートづくりについて「生徒たちが主体的に思考しながら、ノートを作り上げていく構成になっています。（中略）自身のこれまでの思考活動が形となったものなので、後で見返せば授業での学びが再生され効率的に復習することができる」（pp. 105-106）と述べている。つまりただ知識を並べ、考えたことを適当にメモするのではなく、フレームがあることで授業のポイントや自らの思考の流れを書いて整理しや

すくなり、より深い学びにつながるということである。

そこで筆者は図5のような形式でノート（ワークシート）を考案した。この新たに考案したノートフレームは、麴町中学校のノートフレームや高橋（2014）を参考に作成している。このノートフレームは、一般的なノートの使用を想定し、原則一つの授業で見開き1ページを使うものとする。まず左ページには、本時の内容に関わるワークシートを用意しそれを貼らせる。ここをメインに授業が進行

図5 ノートフレーム（案）

する。右ページは生徒に線を入れさせ3つのフレームを作る。まず左下のスペースは授業で生徒が取るメモ欄である。生徒は左ページの内容と連動して上から下を書いていく。次に右下は気づきや疑問等を書き、思考を整理するスペースである。これも左下と同様、左ページの内容と連動して上から下を書いていく。そして右ページ上部のスペースは、本授業のポイントやまとめを書く欄である。ここで授業のポイントを簡潔にまとめ、これを振り返りの記述する際に参考とさせる。このように社会科の授業でもフレームを導入したノート（ワークシート）を使うことで、生徒が主体的に思考を深められ、振り返り活動も充実していくことが期待できる。ただ社会科は一つの授業で取り扱う知識や内容が大変多い教科である。そのためノートの大きさを一般的なものより多くしたり、一つの授業で見開き2ページ使ったりするなど工夫は必要となることを留意しておきたい。

また授業時の指導で授業者が行うべきこととして、ノート記述や振り返りシートの記述の時間を確保することがあげられる。アンケートの結果からも明らかなように、生徒から「振り返りを書く時間が足りない」という声の一部見受けられた。実際、筆者が専門実習Ⅱで授業実践を行った際も、生徒に振り返りを書く時間を十分に与えられず、宿題や休み時間で記述するようにと指示してしまっていた。こういう光景はどの学校現場でも見られると考えられる。しかし、振り返りは学習した内容を鮮明に覚えているうちに書くことに意味がある。堀（2019）も振り返りの学習履歴を書かせるタイミングについて、「可能な限り授業時間ごとに、授業が終わる時に書かせるのが望ましい」（p. 41）と述べている。そこで授業者は、授業時においては内容ごとに間を持たせて、生徒の思考の整理の時間を確保し、授業終盤に

は、最低5分間、振り返りを記述する時間を確保することを心がける必要がある。

5.2 振り返り活動における指導と支援の検討

次に、振り返り活動時における指導と支援について検討する。アンケートの結果から、多くの生徒が振り返りの書き方について悩みを抱えていることが明らかとなった。そこで振り返り活動時には、より具体的な振り返りの視点を生徒に与えることが有効であると考えられる。

そこで筆者は、図6のような「OPPシート」の学習履歴の記述欄を考案した。記述欄には質の高い振り返りの定義を参考に、認知面と思考面それぞれの振り返りの視点を提示している。以下それぞれの視点について説明する。

まず認知面の振り返りでは、「①『今日の授業のめあて』や『授業のポイントのつながり』を意識して自分なりに今日の授業をまとめよう」という視点を提示している。筆者の授業実践の際に使用した「OPPシート」では、学習履歴におい

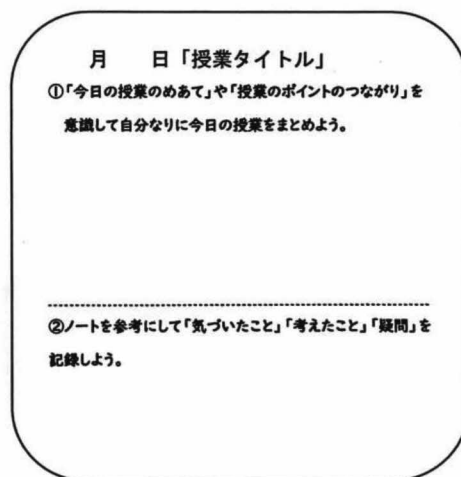


図6 学習履歴の記述欄

て、「今日の授業で最も大切だと思うこと」という問いで振り返りの視点を与えていた。だがこの問いでは抽象的かつ自由度が高く、振り返りの視点が明確ではないと言える。実際、授業の一部分だけを切り取って、振り返りを書いている生徒が筆者の実践でも数名見られた。そのため上記のような具体的な視点を与えることが必要だと言える。

一方で、思考面の振り返りでは「②ノートを参考にして『気づいたこと』『考えたこと』『疑問』を記録しよう」という視点を提示している。図7は、表2、3の生徒番号15番のOPPシートの一部である。この生徒は欄外記述項目数が上位であるが、評価がA,B,BとB評価が有利の生徒である。

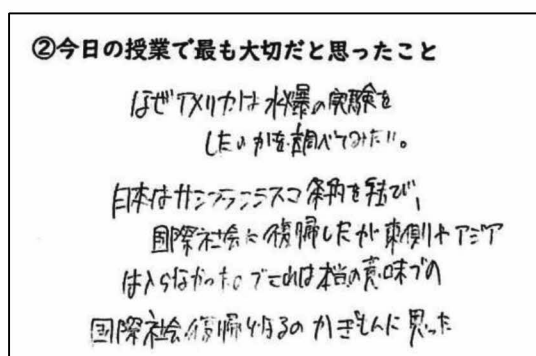


図7 生徒の記述

図7の通り、この生徒の振り返りの記述は、認知面において質の高い振り返りができていると言えない。そのためB評価が有利になってしまったと考えられる。しかし、授業を通して考えたことや疑問に思ったことが簡潔に記述されており、思考面での振り返りとして他の生徒が目指すべき姿に近いと言える。そこでどの生徒にも、この生徒と同様、思考面で質の高い振り返りが書けるようにするためには、上記に

示した具体的な視点を与えることが必要だと考えられる。

またこれらの視点は、前述した授業時のノート（ワークシート）が活かされるものである。そのため授業者には、生徒が思考を巡らせ、それをメモする時間を確実に取り、授業のポイントを生徒と共有する時間を設けることがより一層重要となると言えるだろう。

5.3 その他の指導・支援

ここまで授業時のフレームワークを活用したノート（ワークシート）や OPP シートの振り返りの視点の具体性の向上を方略として、指導・支援を検討してきた。しかしこれらの指導・支援を導入したからといえ、いきなり生徒の振り返りの質の向上が見られるとは限らない。堀（2019）も「OPP シートは毎時間授業に取り入れ、ただ書かせていけば、資質能力が自然と高まっていくわけではありません」（p. 199）述べている。

そこで堀（2019）は必要な支援として、「学習履歴に教師による適切なコメントを加えること」をあげている。そしてそのコメントの例として「自分の言葉で説明するとどうですか？」や「〇〇についてはどうですか？」などがあるとしている（p. 202）。つまり生徒に対して「問いかける」ことによって、生徒に「先生は何を求めているのだろうか」という思考を促し、より質の高い振り返りにつなげるのである。

また堀（2019）は「クラス全員に『一番大切なこと』の要件を考えさせる」ことも必要な指導としている（p. 200）。筆者が考案した OPP シートでは「一番大切なこと」を視点としていないが、生徒全員で学習履歴にどんなことが書かれていればいいか、どのようにまとめればいいのか考えることは有効だと言える。その際、よく書けている生徒の学習履歴を紹介することで、書き方に悩みを抱えている生徒にとって具体的な参考になることも期待できる。以上のように、継続した振り返り活動の指導を通して、適宜その生徒に合わせた指導や支援を行っていくことで、質の高い振り返りを書くことが期待できると言えるだろう。

6. 研究の成果と課題

本研究では、社会科の視点から質の高い振り返りについて明らかにし、OPP シートを用いた実践やアンケート調査から、振り返り活動の指導や支援の在り方について検討してきた。まず先行研究や学習指導要領から、社会科の質の高い振り返り活動について認知面と思考面から定義づけることができた。そしてそれを基に、筆者が教職専門実習Ⅱで行った振り返りシートの生徒の記述を評価すると、質の高い振り返りができる生徒は授業時から主体的に認知や思考の調整を行っていることが示唆され、アンケート調査によってそれが裏付けられた。

これまでの先行研究では、振り返りシートの形式や振り返り活動時の指導・支援に目が向けられていたが、質の高い振り返りを行うためには、ノートテイキングを初めとした授業時からの指導が必要であることが明らかになったことは、本研究の成果と言えよう。

一方で、本研究の課題は2点あげられる。1点目は、書くこと自体にしんどさを抱えている生徒の支援について方略が見出だせなかったことである。アンケートの結果でも「書くこと自体がしんどい、面倒」と回答した生徒がおり、書くことに苦手意識を抱えている生徒が一定数いることは今後も考えられる。しかし振り返り活動は、自らの認知や思考の過程を明らかにすることであるため、書いて表現することは必須であると言える。そのため今後は、そういった苦手意識を抱える生徒でも振り返り活動の重要性を感じられるような働きかけや、ICT等を活用した振り返り活動の支援を検討していきたい。2点目は本研究で提案したフレームワークを活用したノート（ワークシート）、OPPシートを用いて実践を行い、その効果を測定できなかった点である。したがって、1点目の課題と合わせて今後の学校現場で実践、検討を重ね、全ての生徒が質の高い振り返りを行えるよう指導と支援を充実させていきたい。

引用文献・参考文献

- ・ 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策について（答申）」
- ・ 堀哲夫（2019）「一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚用紙の可能性」，東洋館出版
- ・ 今隆史（2010）「『振り返り』学習活動のすすめ－教師を志す学生や新任の教師にむけて－」，平成22年度東京学芸大学教職大学院課題研究成果物
- ・ 今隆史（2021）「深い思考、深い理解を促す『振り返りの手立て』：振り返り活動が難しい子」，『社会科教育』，58巻(1)，pp24-27
- ・ 工藤勇一（2018）「学校の『当たり前』をやめた。－生徒も教師も変わる！公立名門中学校長の改革」，時事通信社
- ・ 文部科学省（2017a）「中学校学習指導要領（平成29年告示）」
- ・ 文部科学省（2017b）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編」
- ・ 文部科学省（2017c）「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編」
- ・ 高田鈴奈（2021）「振り返り活動に関する考察－質の高い振り返り活動の実現に向けて」，京都教育大学大学院連合教育実践研究科紀要
- ・ 高橋政史（2014）「頭がいい人はなぜ、方眼ノートを使うのか？」，かんき出版